

2022年4月17日（日）主日朝礼拝説教

『石は既に転がされて』井上隆晶牧師

I コリント 15 章 51～58 節、マルコ 16 章 1～8 節

### ①【復活のイエス様に会うためには聖書を何度も読みなさい】

今日は復活祭（イースター）です。金曜日に十字架で死なれたイエス様は、この日曜日の朝、墓からよみがえりました。そこで日曜日がお休みになり、世界中に広まったのです。一週間を七日のサイクルで過ごすのは、旧約聖書からの伝統ですが、日曜日をお休みにするのはキリスト教の伝統です。ユダヤ教では今でも土曜日を休みにし、イスラム教徒は金曜日を休みにしています。世界中にもものすごい影響を与えたのが、このキリストの復活なのです。何が起こったのでしょうか。三人の婦人たちがイエス様の遺体に香油を塗るために、日曜日の朝早く墓に行きました。彼女たちは墓に行く途中「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか。」と話し合いながら歩きました。墓は横穴式で、入り口には女性の力ではとても動かすことのできない大きな石で蓋がしてあったからです。「石は非常に大きかったのである」とも書かれています。ところが墓に着き、目を上げてみると、石は既にわきへ転がされてありました。普通、考えられるのは「誰かが先に墓に来たのだろう」という思いです。そこで墓の中に入ると、イエス様の遺体はなく、白い長い衣を着た若者（天使のことです）がおり、「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。」（16：6）と告げました。婦人たちは恐ろしさのあまり震え上がり、正気を失ってしまいました。そして逃げ帰り、誰にも何も言いませんでした。聖書はここで終わっています。読者は思うはずで、「何が起こったの？」「復活について説明しないの？」「そこが知りたいのに」しかし、聖書は天使の「イエスは復活した」という宣言だけを告げます。あなたはこの言葉をどう聞きますか？ユダヤ人はこう考えました。「死人が蘇るなんてことはありえない。弟子たちが婦人たちより先に墓に行き、遺体を盗み出したのだ。そして復活したという噂話を広めたのだ。」後代の人たちはこう考えました。「教会が復活の話を作成したのだ。」しかし他の福音書を読むと、復活したイエス様と出会い、対話をし、食事をし、姿を見た人たちの証言で溢れています。そして彼らは別人のように変わり、命を捨てても復活を伝えました。聖書は、神に出会った人たちの体験の証し集です。あなたはその人たちの語る言葉を信じますか？と問うているのです。

本当にイエス様が復活したかどうか知る方法が一つあります。天使は「さあ、行って弟子たちとペトロに告げなさい。あの方はあなたがたより先にガリラヤに行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる。」と言いました。ガリラヤへ行けば復活したイエス様に会えるのです。ガリラヤとは弟子たちの故郷であ

り、物語が始まった場所です。つまり福音書の最初のページに戻って、そこをもう一度読みなさい、と著者は言っているのです。

先週の月曜日に詩編 35 と 109 を読みました。そこにはイエス様の祈りが載っていました。詩編はイエス様の生まれる 600 年も前に書かれたものです。すべて書かれた通りになっているのです。恐ろしくなりました。聖書は一度読んだくらいでは分かりません。それは聖書が悪いのではなく、私たちの読み方に問題があるのです。私たちは読んでも読んでいません。聞いても聞いていません。見ても見ていません。神は多くの奇跡やしるしを現わして、ご自分が本当に生きておられることを証ししておられますが、人は気がつかないのです。問題は、私たちの鈍さにあります。私になぜ、復活を信じるのか、それは聖書を信じているからです。聖書を信じない人は復活も信じません。では聖書を信じない人たちは何を信じているかということと自分とこの世です。でもこの世や自分ほど不確かなものはありません。人生の失敗、人間の歴史がそれを物語っています。この世と自分を信じる人は必ず絶望します。しかし聖書は愛と希望に溢れています。

## ②【この世がすべてではない。神は破壊された体を修復し復活させる】

●「アインシュタインとフロイトの往復書簡」がネットに載っていました。戦争を避けるにはどうすればよいかを考え続けていたアインシュタインは、政治のみで戦争の問題を解決することは難しいと感じ、人間の衝動に関する深い知識をもつ精神科医のフロイトに、この問題について手紙で尋ねることにしました。アインシュタインはこう書いています。「数世紀ものあいだ、国際平和を実現するために、数多くの人が真剣な努力を傾けてきました。しかし、その真摯な努力にもかかわらず、いまだに平和が訪れていません。とすれば、こう考えざるを得ません。人間の心自体に問題があるのだ。」「なぜ少数の人たちがおびたしい数の国民を動かし、彼らを自分たちの欲望の道具にすることができるのか？…少数の権力者たちが学校やマスコミ、そして宗教的な組織すら手中に収め、その力を駆使することで大多数の国民の心を思うがままに操っている！…答えは一つしか考えられません。人間には本能的な欲求が潜んでいる。憎悪に駆られ、相手を絶滅させようとする欲求が！」つまり、アインシュタインの出した答えは、「人間の心に問題があり、人間の中には本能的に破壊欲求がある」というものでした。

今回のウクライナ戦争で、破壊されたマリウポリの町やブチャの町の惨状を見て、皆さんはどう思いましたか？マリウポリの町は 80% が破壊され、ブチャやその他の村では多くの民間人が殺されました。悪魔の本性は「破壊すること」です。悪魔は神によって造られた人間を破壊し、魂と肉体を分離させ土に帰します。神と人、人との間、人との間を破壊します。つまり人間の中には「悪魔的な心」があるのです。それを聖書は「罪」と呼びます。罪がある以上、人は破壊し続けます。政治の力や人間の善意ではどうにもなりません。しかし神は命を生み出し、回復させます。神とは「命の回復者」です。自然を見ると、春になれば死んでいたよう

な木々に新芽が生えます。エリヤという預言者が神を信じる人が一人もいない、自分だけになってしまったと神に嘆いた時、神は「私は…七千人を残した」(列王記上 19 : 18) と語りました。どれだけ迫害しても、信仰をなくすことは出来ないということです。悪魔は、神の業を完全に破壊することは出来ません。教父たちはいいます。「人間は神の作品だ。悪魔は神のものを破壊し尽くすことは出来ない」残っているのです。聖書が語っているのは、破壊されてしまった体を、神は元通りに修復することがお出来になるということです。元に戻すだけでなく、もっと良い体に作り変えて下さるということです。復活が私たちにはっきりと教えているのは、この世がすべてではないということです。死んだら終わりではないのです。この世で不幸にも、さまざまな病気や災害や戦争や事件や事故で、人は死んでゆきます。ウクライナの病院がミサイル攻撃を受け、妊婦さんが担架で運ばれましたが、腰骨を砕かれており、最初は意識があったのに 30 分後にお腹の赤ん坊と共に亡くなりました。この世は、まことに不公平であり理不尽です。この世が全てだったら彼らは報われません。でもこの世がすべてではないのです。神は必ず報われます。来世で、破壊された彼らの体を修復します。

### ③【復活とは神と一体になること、神に生かされる命のこと】

では具体的に復活とは何でしょう。蘇生ではありません。蘇生というのはこの世の体そのまま生き返ることで再び死んでしまいます。霊魂が肉体から離れて天国に入るのも復活ではありません。それは仏教的な考えです。イエス様の遺体は墓の中ではありませんでした。肉体と魂が一体である人間全体が「神的な新しい体」に変容することを復活といいます。人間は自分の力だけでは復活できません。永遠の命である神と一体にならなければ復活できません。神と一体になって歩んだ者は死なないことを見せるためにイエス様は死んで復活したのです。キリストは神です。その神が人間の体を受け取り、人間と一体になったことにより、死なない体が生まれたのです。

●淀川キリスト教病院のチャプレンをしている久保のどかさんという人がいます。こんなことを書いていました。「こどもホスピス病院にA君が入ってきました。…遊ぶことの好きなA君は、遊びに乗ってきてくれました。でもすぐにゲームを中断して、それよりもさあ…と自分の思いを語り始めました。病気が分かった日に見た満開の桜が綺麗だったこと、気持ちが荒れて死にたいと言って物を投げたこと、でも今は死にたいとは思っていない事、を丁寧に話してくれました。この時から、A君に神様の話を少しずつしていきました。私たちの命は神様が下さったこと、イエス様によって届けられた命は復活の命だから、決してなくなること、私たちの地上での命の時間はいつか終わるけれど、それは本当の終わりではなく、天国に続いていること、などを話しました。そして毎日一緒にお祈りをして過ごしました。A君のお母さんは「Aは神様に包まれています」と言われました。A君は、神様の愛の中にすっぽり包まれて自分の命と向き合い、堂々と生

きました。そのA君の姿は、体力と反比例して、生きるエネルギーに溢れているようでした。…A君は、私たちの“生きる”は神様によって支えられている、そのことを深く教えられました。」

人が自分の力で生きているうちは輝きません。しかし自分が無くなり、神によって生きるしかなくなる時、神の命が入ってきて輝くのです。受難週間にもものすごい量の聖書を読みました。そして分かったことがあります。聞いたから分かったのです。何度も聞いたから入ってきたのです。それはキリストを信じてすべてを委ねて良いということです。この方は私たちの敵ではありません。味方です。人間は彼を信じようとせず、彼を十字架につけて殺しましたが、この方はされるがままでしたし、奪われるままにされていました。衣服も与え、赦しも与え、命も与えました。私たちにご自分のすべてを与えようとしているのです。この方を信じて良いのです。この方の命の力はものすごいのです。この方と一体であれば死にません。この方が何をされても死なないからです。キリストは必ず私を救って下さると信じるのです。

婦人たちが恐れながら墓に行った時、既に墓石はわきへ転がされていました。そして墓の中に入った時、死ではなく命を見たのです。何か人間を超えた神的なものを、命の充満を墓の中に感じて驚き恐れたのです。私たちも死の世界に入った時、そこが命の満ちた世界であることにやがて知ることになるでしょう。聖書に目を上げる人は、人間の前に立ちはだかる死という大きな石は、神によって既に取り除かれていることを知るのです。人間は必ず死ぬことになっている命しか知りませんが、聖書は、必ず生きることになる命があると宣言しています。キリストの命です。だから恐れてはなりません。この神キリストが私と一体になってくださいます。このキリストの命が激流のように私の中に入って来られます。だから私たちは死なない者となるのです。都島教会の合言葉は「私たち死なないのです」です。これを共に唱え、キリストによって与えられた永遠の命を讃えましょう。